

## 地域の歴史を取り入れた日本史の授業

長野 浩典

### はじめに

本号編集担当の佐藤晃洋氏から依頼された原稿の内容は、「地域史研究が高校の授業においてどのようにいかされているかを紹介して欲しい」ということだった。実は勤務校で私が担当している授業の多くは地理であって、日本史の授業はむしろ少ない。また、大学受験をひかえているクラスでの日本史Bの授業は、なかなか融通がきかないこともあり、ほとんどの授業は型通りに行っているというのが正直なところである。ただ、一九九二年に大分市で「九州地区私学教育研修会」が行われたとき、本稿と同名のタイトルで研究発表を行ったことがあり、佐藤氏もその内容を念頭においての依頼であった。したがって本稿は、この私学研修会での発表内容をベースにして、「これまでこんな授業をやってみました」という紹介程度の内容でお許し願いたい。

### 一、地域の歴史を学ぶ意義

地域の歴史を学ぶ意義については、あらためて論を展開するまでもなく、実にさまざまな場面で論じられている。したがってここでは、私の経験と実感にそった考えを述べるにとどめたい。

私がいま地域史を授業に取り入れたいと思った理由は、あまりにも生徒たちが自分たちの地域の歴史に疎いということに気

付いたからである。例えば、「大分が生んだ歴史上の人物をあげなさい」と言えば、きまつて大友宗麟や福沢諭吉があがる。しかし、宗麟がどのような人物で何をしたのかと問えば、「戦国大名」「キリシタン大名」という単語が出てくる程度である。いや、これらの語が出れば上出来といふべきか。福沢もまた然り。「一万円」「学問ノススメ」とくる。誰かの主張のように、「自分たちの地域の歴史に自信を持って」などと言うつもりは毛頭ないが、もう少し地域の歴史を知っておいてほしいと、率直に感じた。

生徒たちが、地域の歴史に疎いということは、私たちの歴史教育のあり方にも係わる問題を含んでいると思われる。私たちが日常展開している教科書中心の日本史の授業は、その性格からどうしても中央の政治や文化を中心に扱うことになる。地域はあくまでも中央に対比されて登場することが多い。しかし言うまでもなく、「日本史」<sup>(2)</sup>とは、営々と築かれた地域の歴史の総体であるから、地域の歴史を系統的にたどることができれば、日本史全体の理解を深めることができるのではないかと思う。まさに、「全国史と地域史は車の両輪」<sup>(3)</sup>と言えるだろう。

二つめに、歴史学習における興味や関心を引き出す材料となるということである。たとえば幕藩体制の学習で、自分の住んでいるところは何藩領だったかを調べさせたことがある。周知のように豊後はいわゆる小藩分立であったが、多くの生徒が住んでいるこの大分市ですら、各藩の領域が錯綜している。ある生徒は幕府領、ある生徒は熊本藩領、ある生徒は延岡藩領、ある生徒は臼杵藩領といった具合である。生徒たちはけっこう興味をもって調べ、そして他の生徒との違いに関心をもっていたように思われる。地域の持つ特殊性を出発点に、なぜそうなのかを考えさせることができたように思う。

三つめに、地域の文化財を保護・尊重しようという意識を引き出すことができると思われる。後述するように、校外学習として府内の城下町の痕跡を訪ね、さらに感想文を書かせる授業をおこなったことがあった。感想文には、生徒たちがふだん何気無く見てきたものが、江戸時代以来の城下町の痕跡だと知ったときの驚きや、「これは後世に残しておくべきだ」というような文章が随所にみられた。自分たちの住んでいる地域を歴史的な視点から再認識した結果である。

四つめに、地域の民衆の歴史がなによりも豊かであると私自身が気付かされたからである。私はいま、郷土史研究部の顧問をしており、生徒たちと一緒に地域の歴史の掘りおこしを行っている。近年は主に近現代の民衆史についてテーマを設定しているが、例えば明治期のコレラの流行を研究したときなど、当時の人々の生活から意識までリアルにうかびあがった。そして文明開化と民衆生活とのギャップに私も生徒たちも気付かされた。本物の歴史を知るためのすぐれた材料は、その地域にこそ存在するのだとつくづく思った。まさに、地域は学習教材の「宝庫」である。

## 二、地域の歴史を取り入れた日本史の授業

### (一) テーマ学習として

二) 三年生で日本史を履習するクラスを三年生から受け持ったことがある。これは進学希望者と就職希望者が混在する普通のクラスのであった。授業は、中世後期から前任者を引き継いだ。この年(一九九一年)には、計画的にテーマ学習を試みた。タイトルと授業の概要は次のとおりである。

第一回―「大友宗麟の生涯」(大友宗麟の年譜に関連した資料を作成・配布して宗麟の年齢にそって、権力の確立・領国支配の拡大・抗争に明けられる日々・豊後のキリシタン文化などに触れた)

第二回―「豊後の小藩分立」(生徒の住んでいる場所がもと何藩領だったかを調べさせて小藩分立の状況について確認させ、さらに大名配置の特徴について考えた)

第三回―「大分の農民のくらし」(古川古松軒の「西遊雜記」にある豊後の農民のくらしの記述を材料に、江戸時代の農民の生活実態について学んだ)

第四回―「府内の城下町」(城下町の古地図(絵図)を教材にして、現在もその痕跡がいくつも残っていることを確認。校外学習の事前授業)

第五回―「日清・日露戦争と大分」(両戦争での大分県の戦死者数を材料にして近代戦の実態について考えた)  
第六回―「米騒動と大分」(臼杵と別府でおこった騒動の緊迫した経過を追い、米騒動の原因や意義を考えた)

第七回―「大分市内の文化財」(大分市内の文化財をスライドでみせ、身近なところにすぐれた文化財が残されていることを知る機会とした)

テーマ学習を行っていくつかの問題点が浮かび上がった。第一に「計画的」とさきに書いたが、こうして並べてみるとテーマの選択自体が断片的で一貫性に欠けると言える。第二にテーマや資料がじゅうぶん生徒たちの興味や関心を喚起するものであったかどうか。第三に生徒たちがどの程度理解しているかをじゅうぶん確かめずじまだったこと。第四にテーマ学習の頻度と授業の進度との関係をじゅうぶんに検討しなかったことである。

## (二) 校外学習として

校外学習は、授業クラス生徒全員をつれて見学に出るわけで、時間割りの変更、天候、交通機関の問題など、いくつかの条件がクリアされなければ実施できない。またじゅうぶんな事前準備(事前授業も含む)や下見など、実施までかなりの労力を要する。だから、頻繁に実施するわけにはいかないのが現状である。

近年、歴史公園として整備された亀塚古墳(大分市坂の市)には、整備以前に二、三年続けて訪れた。古墳時代の学習を終え、事前授業として「大分市内の古墳」の学習をしたらうえて出た。事前の「大分市内の古墳」の学習では、亀塚古墳、蓬萊山古墳、千代丸古墳、古宮古墳、滝尾百穴など大分市内の古墳のスライドを見て、古墳の形状や場所の変遷などについて学んだ。それによって生徒は、亀塚古墳についての基礎知識をもって出かけた。土曜日の三時限目から勤務校のバスを使って出発した。何回目かを訪ねたときは、公園整備にむけた発掘調査がちょうど行われており、大分市教育委員会の方に現地の説明をしてもらうなどの幸運に恵まれたこともある。

「城下町のあとをたどる」と題した校外学習は、もともと郷土史研究部で調査し発表した「城下町の痕跡をさぐる」を生か

した授業である。『大分市史（中巻）』の記述や付図に依拠しながら、郷土史研究部の生徒とともに旧城下町の痕跡をたどりながら歩いた。府内藩の城下町は、戦時中の空襲などで城下町の痕跡が少ないと思っていたが、けっこう痕跡を見いだすことができる。校外学習では、まず事前授業を行い、歩くルートと史跡の説明を行った。見学ルートは、学校を出て↓①旧堀川町（旧城下町の船入りに隣接）↓②第一勸業銀行大分支店（船奉行屋敷跡）↓③中央警察署・トキハデパート前通り（中堀跡、埋め立てられて道路となっている）↓④大分幼稚園の白壁（武家屋敷の白壁の一部）↓⑤府内城天守台⑥人質櫓・宗門櫓（非再建の江戸時代の建築物）↓⑦中村病院付近の街路（城下町特有のT字路やカギ型路）↓「よろずやまち」の標柱（山弥長者の屋敷跡？、城下町の商家エリア）↓⑧大手町と長浜町の境界の水路（船入りの跡）↓⑨旧大分県教育会館前暗渠（城下町南限の堀跡の一部）↓⑩萬壽寺北の水路（城下町東限の堀跡の一部）。コース全長約三・五キロメートル所要時間約二時間であった。この校外学習でいちばん気をつかったのは、四〇人あまりの集団で市街地を移動するということであった。それで見学コースもなるべく交通量の少ない安全なルートをとることにした。また、安全のために徒歩で歩道を歩くよう徹底した。

この「城下町のあとをたどる」に対する生徒たちの反応は概ね良好であった。学習後に八〇〇字の感想文の提出を求めたが、気付いた点をいくつかあげてみる。第一に校外学習は小学校以来で懐かしく楽しいという、率直な感想が多かった。第二に、いくつかの新鮮な発見があったと書いている。自分たちの学校が海（浜）だったこと、城下町が意外に大きいこと、見慣れた白壁が武家屋敷のものであったこと、悪臭ただよう水路が堀の一部であることなど。第三に、新しい疑問をもちはじめたことである。大分の城下町はなぜ衰退したのか？、大分の方言が九州の中でも特徴的なのはなぜか？など、発見から出発して疑問が生まれ、みずから考えて答えを出そうとしている生徒が何名かみられた。第四に、城下町の面影が失われていくことに対して、文化財保護の必要性を訴える文章が多かった。漠然とした文化財保護論ではあるが、乱開発などにたいする批判的な意識はこうして引き出されるのだと感じた。いずれにしても生徒たちは、自分の足で歩き、目で見て耳で聞いて、悪臭を嗅ぎ、まさに五感をフルに使って学習した。

### (三) 視聴覚教材の作成と利用

私は十年ほどまえから、大分市内の文化財を撮影してスライドで保存する作業を続けている。同僚の協力者とともに、撮影に出かけたこともしばしばあった。また、郷土史研究部の調査・研究活動の過程で、多くの写真を撮影してきた。こうしてストックしたスライドの枚数は、一五〇〇枚（未整理を含む）を超えるほどになった。まとまったものとして、「大分市内の古墳」「大分市内の石仏」「大友館跡」「大分市内の神社の絵馬」「御城下絵図」（大分市歴史資料蔵の複製）「大分市内の溜池」「戦争関連記念碑」などがあり、OHPを併用して授業でしばしば利用してきた。

さて、撮影するのはよいが、整理して教材化するのはたいへんである。誰でも授業で使えるようにするには、一枚一枚のスライドに番号をつけて「スライド解説マニュアル」を作成しなければならない。こうすれば、地歴科の共有の財産ともなりうる。しかし、この「マニュアル」は全体のスライドの枚数の三分の一程度しかできていない。どうしてもスライドの枚数だけが増えていき、整理が追い着かないというのが正直なところである。さきの九州地区私学教育研修会においても、助言者から「スライドは個人の財産となって埋もれてしまいがちだから……」との指摘を受けたが、まさにここが最大の課題だと思う。

### (四) 教科通信の発行と利用

数年前からは、「教科通信」をつくって生徒に配布している。「教科通信」にはいろいろな形態のものがあるが、私のものは大分の地域の歴史を題材とした「読みもの」として作っている。だから「通信」というより「資料」といったほうが良いかもしれない。B4横一枚で、左側半分（B5）に文章、右側半分に写真や図などの関連資料をつけている。発行は不定期で少しづつ書きたため毎年くりかえし使えるようにしている。文章は「平易で面白く、生徒の興味がきたてられるように」書いているつもりであるが、なかなか難しい。これまで次のようなタイトルのものを発行してきた。

第一号「大分に象がいた頃―草原がひろがり、象が歩く―」

第二号「縄文人はグルメ？―横尾貝塚の縄文人の食生活―」

第三号「邪馬台国はどこにあったのか―邪馬台国宇佐説」

第四号「県内最大亀塚古墳―海人部の首長の墓か」

第五号「『豊後風土記』の世界―古代大分を知る豊富な情報源」

第六号「壬申の乱と大分君―恵尺と稚臣の大活躍」

第七号「『大分』はなぜ『オオイタ』か―地名『大分』の由来」

第八号「元町石仏―平安末期の傑作」

第九号「大分の荘園―植田荘の構造」

第一〇号「戦国大名に成長した大友氏―守護から戦国大名へ」

第一一号「生類憐みの令―各藩はどのように対応したか」

第一二号「福沢諭吉と中津―門閥制度は親の敵でござる」

第一三号「コレラと民衆―文明開化期の民衆の姿」

第一四号「日清戦争から一〇〇年―大分県民と日清戦争」

第一五号「燐寸(マッチ)の配給は月ひとりあたり九〇本―戦時下の国民生活」

第一六号「沖縄県民の疎開と大分―敗戦前後、約一万人」

#### (五) 郷土史研究部の活動

郷土史研究部の顧問をしていることは既に述べた。部の顧問として生徒たちといっしょに地域の歴史を掘り起こす活動が、史資料を収集する上で、また生徒たちの意識を探る上で重要な要素になっている。郷土史研究部は、毎年テーマを決めて調査研究を行ってきたが、ここ十年のテーマは次のとおりである。

一九八九年度「柞原八幡宮と金蔵院―神仏習合と神仏分離―」

一九〇〇年度「大分の七島―大分県の七島生産の歴史―」

一九〇一年度「城下町の痕跡をさぐる」

一九〇二年度「『御城下絵図』の人々」

一九〇三年度「絵馬の研究―柞原八幡宮の大絵馬を中心として―」

一九〇四年度「大分の溜池」

一九〇五年度「沖繩住民の疎開と大分」

一九〇六年度「明治一二年のコレラ大流行と民衆」

一九〇七年度「戦争記念碑の研究」

一九〇八年度「戦争記念碑の研究 II」

調査や研究の過程でいろいろな史資料にでくわす。テーマに関係あるものはないものいろいろだが、「これは授業に使える!」と思われるものがたくさんある。例えば、沖繩住民の疎開を調べているとき配給制度に関する資料もいろいろ見つかったが、これらは「戦時下の国民生活」の授業で使ったりした。また、「『御城下絵図』の人々」の調査過程で大分市歴史資料館に複製していただいた「絵図」(スライド)は、江戸時代の府内城下の民衆が生き生きと描かれており、授業で使ってもおもしろい資料である。

いま、全国の高校生による地域の歴史の掘りおこしがさかんにおこなわれている。そして、長野や高知や広島などでは、地域の掘りおこしが、平和運動の領域にまで広がりをみせている。<sup>(5)</sup>ここでの高校生たちの熱意と能力には、敬服させられる。これらに比べれば、わが郷土史研究部の活動はまことにささやかではあるが、今後も地道な活動を続けていきたい。



## 三、授業の方法―むすびにかえて―

以上、私の授業を紹介してきたが、思いつきで安易にやってきたものが多い。であるから、進学クラスでの授業になると、地域の歴史を取り入れる頻度が大きく落ち込む。また、地域教材を安易に持ち込むことでかえって「こどもを迷路に引き込むことになる」との指摘もある。地域の歴史をどのように授業の中に取り組むか。この方法について大いに刺激を受けたのが鹿毛敏夫氏の報告である。

この報告の中で鹿毛氏は、「大学進学を前にした進学校生徒にとって実際に必要なのは、郷土の昔話や英雄のエピソードではなく、教科書を中心とした通史的な諸知識」であるとして、「特別に郷土史の主題学習の時間を設定するのではなく、日常の通史学習のなかに地域社会の歴史と文化に関する事項を位置づけて授業展開する方法が有効である」という。そして、学習内容に興味・関心をもたせるための「①授業の『導入』で郷土史を使い、学習の動機づけとする方法」、「導入」から「展開」の一部分にまで踏み込んで生徒の理解を深めるため「②郷土史を実例として、歴史的知識を理解させる方法」、さらに「導入」「展開」「まとめ」の「③授業の全ての過程に郷土史を使い、歴史的知識・意義を理解させ、歴史的思考力を育成する方法」の三つの方法を有効に使い分ける授業を試みられている。そして地域史の教材を精選し、年間指導計画の中に位置づけられた。鹿毛氏の報告は、進学校での年間計画に基づいた授業の進度を保ちながら、一方で地域史をどのように授業に取り入れて展開するか、という問題のひとつの解決方法を示している。魅力ある多様な授業構成・展開と受験指導とのあいだの矛盾解決に向けた鹿毛氏の努力に共感を覚えると同時に、地域の歴史をこれまで無原則に授業に取り入れてきた私自身の方法に反省を迫られた。

最後に、地域史研究または地域史の「掘り起こし」は、そのものが一つの独立した領域として成り立っている。そこでの研究成果が教育の現場で生かされるためには、地域史研究と教育現場とを結ぶ媒体者が必要になる。その媒体者が現場の教師で

あることはいうまでもない。すぐれた媒体者となるための積極的な活動と学習が、地域史を教材としていかすことのできる実践者をつくりあげるのだと思う。

注

- (1) ここでの発表内容は、『第三十四回九州地区私学教育研修会研究集録』に収められている。
- (2) いつから「日本史」が成立するのか、ある地域がいつ「日本」に含まれたのかなどの問題は、ここではとりあえず置いておく。
- (3) 遠山茂樹「神奈川の歴史を学ぶ意味」(『遠山茂樹著作集 第七巻 歴史教育論』岩波書店、一九九二年)
- (4) 一九六六年(昭和四一)に創立された文化部。毎年テーマを決めて調査・研究を行い、大分県高等学校文化連盟社会部主催の研究発表会で成果を発表している。
- (5) これについては、澤野重男「高校生と地域掘りおこし」(『新しい歴史教育④』大月書店、一九九四年)にコンパクトにまとめられている。
- (6) 前掲『新しい歴史教育④』一一ページ。
- (7) 『社会部会研究集録(二八号)』(大分県高等学校教育研究会社会部会)。なお鹿毛氏は、当時県立雄城台高校教諭、現在大分県立先哲